

日本学士院賞 受賞者

安<sup>あん</sup>藤<sup>どう</sup>隆<sup>たか</sup>穂<sup>ほ</sup>



専攻学科目 社会思想史

生年 昭和二十四年一〇月  
略歴 昭和四八年 三月

同 五〇年 三月 名古屋大学法学部政治学科卒業

同 五四年 四月 名古屋大学大学院経済学研究科修士課程修了

同 五六年 四月 名古屋大学経済学部助手

同 五八年一二月 日本学術振興会奨励研究員

同 六三年 二月 名古屋大学経済学部講師

同 六三年 二月 名古屋大学経済学部助教授

平成 元年一〇月 経済学博士

同 六年 三月 名古屋大学経済学部教授

同 一二年 四月 名古屋大学大学院経済学研究科教授（現在に至る）

## 経済学博士安藤隆穂氏の『フランス自由主義の成立——公共圏の思想史』に対する授賞審査要旨

本書（名古屋大学出版会、二〇〇七年二月）はフランス自由主義の成立過程を、それを支えそれに支えられる公共圏の思想史として、旧制度内部の改革運動から大革命をへてギゾー体制に至る約百年を一貫した視点と広範な視野をもって追求した、社会思想史の力作である。八五〇を超える文献注は、研究史に対する慎重な配慮を示しているが、それらの研究が主としてフランス政治思想史の枠内にとどまっていたのに対して、著者はイギリス経済思想（アダム・スミス）とドイツ文学（ロマン主義）の側からも照明をあて、まったく新しい思想像の発見に成功した。こうした学際的で国際的な思想研究の方法は、日本からこそ発信できる独創性をもつものといえよう。

この方法によって著者が描いた思想史を略述すれば次のとおりである。末期ブルボン王政の内部には上流商人を中心とする重商主義的改革案（ネツケル）、地主を中心とする重農主義的改革案（デュポ

ン・ドゥ・ヌムール）があったが、著者はそれらとやらんで、『富の生産と分配について』（一七六六）によってアダム・スミスに先んじたチュルゴが、小生産者・商人を中心とする改革案を持ち、それがチュルゴの挫折をこえてコンドルセによって継承された点に、フランス自由主義の出発点を見る。コンドルセは一〇年のちにスミスが『国富論』（一七七六）で全面的に展開する商業社会（分業と協業の体制）論に学びつつ、黒人奴隷、地方議会、民衆教育などスミスの目に触れなかった問題をも組み込むことによって、フランスにおける商業社会の形成過程をとらえようとする。かれは近代社会の中心となるべき近代的個人を、広範な集団すなわち公共圏として展望しながら、大革命の動乱の犠牲になったが、かれだけではなく革命全体が、この種の展望を求める運動であった。その中で特に強力だったのが、ジャコバン独裁とテルミドル反動の思想であり、前者はルソーによって、後者はシエイエスやイデオログたちによって代表される。いずれも近代人と近代社会をもとめながら、ジャコバン派はルソーに依拠して単一の公共精神（一般意思）しか認めず、所有と意見の多様性を許さなかったし、テルミドル派はコンドルセの後継者をもって自任しながら、市民を財産と知識の水準によって区別し、コンドルセの公論、公共圏の意味を理解しなかった。コンドルセは教育論によって、スミスが分業の弊害（作業の単純化に

よる思考の単純化)を見た社会層をも所有者社会に組み入れ、そこに広範な諸個人の意見の集合としての公論の成立を期待した。

コンドルセの獄死後、その思想と運動は妻のソフィー・コンドルセによって発展的に継承された。ソフィーはスミスの『道徳感情論』に強い関心を持ち、その最終増補版(一七九〇)を翻訳しただけでなく「同感についての手紙」で解説した。これによって夫のコンドルセが『国富論』から読み取った、それぞれの利益を追求する自由平等な個人の集団としての経済社会に、相互同感をもとめての自己規制という近代社会の非政治的原理が透視されることになる。一七九五年にパリにはいったコンスタンとジェルメーヌ・スタール(前記ネットケルの娘)にとつて、個人の感情によつてつなく自律社会というソフィー・コンドルセの思想は理解しやすかった。とくにコンスタンはエディンバラに留学してスコットランド啓蒙思想を吸収しただけでなく、イギリス社会における言論の自由の意味を知っていたし、他方でスタールはアウグスト・シュレーゲルとの親交を通じて、個人感情を中心とするドイツ・ロマン主義の文学思想を吸収していた。コンスタンは彼女の小説『コリンヌ』(一八〇七)の批判的分析により、ヨーロッパ諸国のうちで、個人の意見の集合体としての公共圏が最も尊重されているのはイギリスであると結論するのだが、同じくイギリスをモデルとしながら、やがて政権を取るギゾー

がそこに見るのは、階級として成立したブルジョワジーの理性の支配であった。

チュルゴ改革をコンドルセが引き継いで以来、小市民によつて形成されてきた公共圏は、革命とその前後の政治変動の外側に、個人主義的自由主義の空間として生きつづけてきたが、言論・出版の絶対的自由というコンスタンの主張を最後として、ギゾーの自由主義体制に組み込まれて形を失い、出版活動はコンスタンの展望とは逆に言論操作の手段となった。しかし居場所を奪われたこの自由主義は途絶えることなく、フランス特有の反体制思想として、ロマン主義や社会主義の中ならばその姿を見せている。

本書はこのような内容を持つ力作であるが、時として文章が勢いあまって走りすぎたり、公共圏を類似の用語から区別するのに読者の努力が必要であったりするが、それはほぼ百年にわたるフランス思想史のなかから、実質としての公共圏を取り出そうとする著者の苦闘を反映した瑕疵と見ることができよう。